



## 心を寄せる（5）

“2022年2月にロシアによる侵攻が始まり、激しい爆撃で街は破壊され、多くの市民が死亡し甚大な被害を受けています。約508万人が国内で、約626万人が世界各地で避難を強いられており、その大部分が女性と子どもです”【国連UNHCR協会（国連難民高等弁護団）】

上記は、ウクライナの状況ですがウクライナ以外にも、今世界中に自分の国で安心して暮らせずに難民となった人たちがたくさんいます。



下記の記事は、国連UNHCR協会の広報誌に掲載されていたものです。

・ファンジェルさん（48歳）は2012年、家族とシリアからヨルダンへ避難してきました。しかし、2017年に夫が他界。今は息子のヌールくん（9歳）と2人で支えあいながら避難生活を送っています。ヌールくんには心臓に持病があり、UNHCRからの現金給付支援で毎日の生活費と家賃を支払っています。ヌールくんは学校でいじめを受け、2か月ほど休んでいます。涙ぐむ母親のファンジェルさんの頬を、自分の指で黙ってぬぐったヌールくん。将来は人々を無料で診察できるようなお医者さんか船の船長になりたいという夢を描いています。

・ファティマさんはアフガニスタン・バーミヤン渓谷の洞穴で幼い子どもたちと3人で暮らしています。戦闘を逃れ2年前に避難し、故郷へ戻ってきましたが、家を借りるお金がないため、この小さな洞穴に住むしかなかったのです。洞穴では夏は昼夜を問わずサソリが出て子どもたちを脅かし、冬は極寒となる過酷な暮らしです。今、一家はUNHCRからの現金救援を受けて生活しています。

・イクラーンさん（26歳）は、2023年にソマリア・ラスカヌードで戦闘が起こった際、タクシーの運転手だった夫を亡くしました。激しい暴力により約10万人が隣国エチオピアへ逃れ、妊娠7か月だったイクラーンさんも、6歳と3歳の子どもたちを抱えて必死で避難しました。難民居住地で暮らし、幼い子どもたちと生まれてくる赤ちゃんに明るい未来がくることを夢見る彼女は言います。「世界中のシングルマザーたちには、過去を振り返らないで、前を向いて進み続けてほしいです」

「国連UNHCR」や「ユニセフ」、「国境なき医師団」などの団体には、困っている人たちのために自分のことを顧みずに働いている日本人がたくさんいらっしゃいます。同じ日本人として誇りに思います。

上記の国連UNHCR協会の広報誌の文章を読んで「青少年育成センターだより第157号」で紹介した、瀬戸内寂聴さんの“自分以外の誰かを幸せにするためにこの世の中にいるのだ”という言葉を変えて思い出し、自分に何ができるのかと考えさせられました。

ぜひ、「困っている人たちのために何ができるのか」について、みなさんのご家庭でも子どもを交えて考えてみられませんか。“お腹がすいても食べるものがない”“寒くても被る毛布がない”“病気になっても医者に見てもらえない”“勉強したくても学校にいけない”等、世界にはそのような人々がたくさんいます。子どもたちはそのような人の存在を知った時にどのように考えるのでしょうか。子どもに温かい心が育まれる機会になるのではないかと思います。